<原　著　論　文>

中学生の悩み経験と被援助志向性
—スクールカウンセラーに対する被援助志向性に焦点を当てて—

跡見学園女子大学　　志木市立教育サポートセンター
山口　豊一　　井上　朋美

Distress Experience of Junior High Scholl Students and their Intentionality for Seeking Help
- Focus on intentionality for seeking help given by a school counselor -

Atomi University　　Shiki City Education Support Center
Toyokazu, Yamaguchi　　Tomomi, Inoue

キーワード：中学生,悩み,学校適応,被援助志向性,スクールカウンセラー

KEY WORD: junior high school students , perceived problems , school adjustment, help-seeking preferences , school counsellor

概要

本研究では,現代の中学生の悩み経験の領域を明らかにし,スクールカウンセラーへの被援助志向性との関係を検討することを目的とした。その際,中学生 470 名を研究協力者として,質問紙調査を実施した。因子分析の結果,「心理」領域,「学習」領域,「先生への不満」領域,「部活」領域,「健康」領域の 5 領域が抽出された。それぞれの領域における男女差を検討したところ,「学習」領域と「部活」領域で男子よりも女子の方が悩み経験が高かった。学年差では,すべての領域において,1 年生よりも 2 年生や 3 年生の方が悩み経験が高かった。また,スクールカウンセラーへの被援助志向性については,「心理」領域と「学習」領域において悩み経験高群が,低群よりも高いことが明らかになった。なお,スクールカウンセラーへの被援助志向性は全体的には低いという結果であった。今後,より一層スクールカウンセラーの相談活動が定着することが求められる。

1.　問題と目的

昨今,中学教育現場において,生徒指導上の諸問題が山積している。文部科学省（2011）は,中学生の暴力件数が 42,114 件,いじめの認知件数が 32,348 件であったと報告した。不登校については,ここ数年ゆるやかに減少傾向であるが,依然としてその数は多い。文部科学省（2011）の報告では 93,926 名であり,37 名に 1 人が不登校という割合であった。つまり,およそ 1 クラスに 1~2 人が不登校であることを示している。また,近年では,生徒の自殺の増加も懸念されている。

中学生は,青年期の始まりの時期にあたり,心身の発達において様々な課題に直面する。エリク

ソンの心理社会的発達理論では,自我同一性確立の発達課題が挙げられ,自分が何者なのか模索する時期である。その中で,進路決定や受験などの現実的な問題に取り組む。さらに,第二次性徴を迎え,身体的にも急激な変化が訪れる。すなわち,中学生という時期は,心理的にも身体的にも重要な局面にあり,多くの葛藤や悩みを抱えているだろうことが推測される。こうしたことから,中学生の援助ニーズは多岐に渡り,周囲の大人がそれに応えていくことが必要であると考えられる。

援助ニーズに応えるにあたり,子どもたちがどのように周囲の者に援助を求めるかを考えることは重要な視点である。それに関して,水野・石隈（1999）の被援助志向性という概念がある。被援助志向性とは,「個人が,情緒的,行動的問題および現実生活における中心的問題で,カウンセリングやメンタルヘルスサービスの専門家,教師などの職業的な援助者および友人・家族などのインフォーマルな援助者に援助を求めるかどうかについての認知的枠組み」である（水野・石隈, 1999）。

援助者は,スクールカウンセラー（以下,SC とする）や教育相談機関の相談員などの専門的ヘルパー,学校の教師などの複合的ヘルパー,保護者や兄弟姉妹などの役割的ヘルパー,友人などのボランティア的ヘルパーに大別される（石隈,1999）。山口・水野・石隈（2004）は,これらヘルパーと被援助志向性の関連について検討し,生徒が,専門的ヘルパーや複合的ヘルパーよりも,役割的ヘルパーやボランティア的ヘルパーに援助を求めることが多いことを明らかにした。しかしながら,山口ら（2004）の研究からおよそ 10 年が経過した現在,SC や相談員の存在がより定着していると予想され,専門的ヘルパーへの被援助志向性が高まっていると考えられる。たとえば,不登校の生徒のうち,学校内外の相談機関に相談したという割合は 52.3%であり,前年度よりも上昇している（文科省, 2011）。

そこで本研究では,(1)現代の中学生の悩みの領域を明らかにし,(2)SC に対する被援助志向性と悩みの領域との関連を検討することを目的とする。

2. 方法

1) 研究協力者

関東圏内の公立中学校 2 校に在籍する中学生 470 名（1 年生 208 名,2 年生 194 名,3 年生 68 名）が研究の協力者であった。

2) 調査時期

調査は,2010 年 5 月から 6 月にかけて実施した。

3) 測度

山口ら（2004）の作成した「悩み経験・深刻度尺度」を使用した。この尺度は,「心理・社会」,「学習」,「進路」,「心身・健康」の 25 項目 4 因子構造である。「授業の内容が分からないとき」「自分の適性が分からないとき」など,中学生の悩みの状況が 25 項目挙げられている。問 1 では,25 項目それぞれに対し,経験の有無を「1：よくある」から「4：まったくない」の 4 件法で回答を求めた。問 2 では,25 項目それぞれの状況で,SC がいたら相談したいと思うかどうかを,「1：とても

思う」から「5：まったく思わない」の5件法で質問した。さらに,問3では,悩んだときの相談相手としてSCが必要かどうかを,「1：とても必要である」から「5：全く必要でない」の5件法で質問した。なお,集計にあたっては,逆転処理を行い,得点が高いほど悩み経験が多くなるようにした。また,欠損値には平均値を代入して分析を行った。分析対象は470名であった。

4) 回収方法

クラスごとに集団で実施し,無記名で回収した。

5) 倫理的配慮

倫理的配慮として，調査への協力は任意であり，回答したくない場合には回答しなくて良いこと，全ての回答は統計的に処理されるので，個人の回答が特定されることはないことを伝えた。

3. 結果

1) 悩み経験尺度の検討

はじめに,各項目のフロア効果および天井効果を調べたところ,項目No.10,11,14,18,20,23,24,25にフロア効果が認められた。それら8項目を除き,主因子法・プロマックス回転による因子分析を行った。解釈可能性から,5因子が最も妥当な因子数と考えられた。また,因子負荷量が0.40に満たなかった項目を除外した。その結果,14項目で5因子解での解釈を最適解とした（$\alpha=0.858$）。この5因子による累積寄与率は,49.097%であった。因子分析の結果を,表1に示す。

第Ⅰ因子には,「16.自分の適性が分からないとき」,「15.将来の自分の進路について心配があるとき」,「9.自分の性格や体格や容姿で気になることがあるとき」など,自分のアイデンティティに関係する5項目が集約された。これらは,自分の心理的発達に大きく影響する内容であると考えられ,「心理」（$\alpha=0.750$）と名付けた。

第Ⅱ因子は,「2.自分に合った勉強法が分からないとき」,「3.勉強しても,成績が伸びないとき」,「1.授業の内容が分からないとき」の3項目が集約された。これらは,学習に関する内容のため,「学習」（$\alpha=0.762$）と名付けた。

第Ⅲ因子は,「13.先生に対して不満があるとき」,「8.教科の先生の接し方や教え方に不満があるとき」の2項目が集約された。これらは,学校の先生に対する不満に関する項目であるため,「先生への不満」（$\alpha=0.748$）と名付けた。

第Ⅳ因子は,「12.部活がうまくいかないとき」,「7.部活と勉強がうまく両立できないとき」の2項目であった。これらは,部活での苦戦を示す項目であるため,「部活」（$\alpha=0.704$）と名付けた。

第Ⅴ因子は,「21.頭痛・腹痛などが起こるとき」,「22.一日中,眠かったり,身体がだるくなったりするとき」の2項目であった。これらは,身体的な健康に関する項目であるため,「健康」（$\alpha=0.589$）と名付けた。なお,第Ⅴ因子に関しては,α係数がやや低い。しかし,この第Ⅴ因子は,身体的な健康に関するものであり,中学生の悩みには密接に関連していると考えられた。したがって,

第Ⅴ因子も含めて採用した。

以上より,「心理」,「学習」,「先生への不満」,「部活」,「健康」の5下位尺度から,14項目5因子構造の「中学生の悩み経験尺度」が得られた。第Ⅴ因子以外においては,概ね高い信頼性が確認された。

表 1　中学生の悩み経験尺度（主因子法・プロマックス回転）

N=470

No	因子負荷量 Ⅰ 心理	Ⅱ 学習	Ⅲ 先生への不満	Ⅳ 部活	Ⅴ 健康	
16) 自分の適性が分からないとき	.732	-.014	-.111	-.060	-.015	
15) 将来の自分の進路について心配があるとき	.634	-.027	.043	.030	-.011	
9) 自分の性格や体格や容姿で気になることがあるとき	.553	-.004	.110	-.017	.045	
19) 自分の能力や態度が、先生からどのように評価されているか気になるとき	.533	-.052	-.034	.081	.043	
17) 進学や就職のことに真剣に取り組めないとき	.508	.113	.061	.025	-.001	
2) 自分に合った勉強法が分からないとき	.104	.803	.056	-.103	-.094	
3) 勉強しても、成績が伸びないとき	.002	.725	-.149	-.003	.077	
1) 授業の内容が分からないとき	-.150	.680	.103	.051	.072	
13) 先生に対して不満があるとき	.029	-.090	.805	.017	.028	
8) 教科の先生の接し方や教え方に不満があるとき	-.045	.077	.758	-.016	-.022	
12) 部活動がうまくいかないとき	.001	-.098	.007	.851	.035	
7) 部活と勉強がうまく両立できないとき	.088	.286	-.007	.516	-.073	
21) 頭痛・腹痛などが起こるとき	-.022	-.005	.000	.042	.665	
22) 一日中、眠かったり、身体がだるくなったりするとき	.126	.078	.011	-.048	.533	
因子寄与						49.097%
因子相関	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ	
Ⅰ	-	0.584	0.485	0.62	0.595	
Ⅱ		-	0.476	0.537	0.423	
Ⅲ			-	0.549	0.429	
Ⅳ				-	0.497	
Ⅴ					-	全体α
α係数	0.750	0.762	0.748	0.704	0.589	0.858

2) 中学生の悩み経験尺度における下位尺度間の検討

(ア) 男女差

中学生の悩みに男女で差がみられるか検討するため,*t*検定を行った。分析に当たっては,それぞ

れの下位尺度ごとに項目得点を算出し,項目数で除した値を下位尺度得点とした。なお,男女が判断できる 442 名のデータを対象とした。結果を,表 2 に示す。分析の結果,「学習」と「部活」において有意差が見られた。「学習」では,5%水準で有意に,女子の方が得点が高かった($t(440)=2.37, p<.05$)。「部活」においては,1%水準で有意に,女子の方が得点が高かった($t(440)=3.01, p<.01$)。また,尺度全体においては,5%水準で有意に,女子の方が得点が高かった($t(440)=2.31, p<.05$)。

表 2　中学生の悩み経験の男女差

N=442

	男		女		
	M	*SD*	*M*	*SD*	*t*値
全体	2.27	0.60	2.40	0.60	2.31*
心理	2.15	0.74	2.27	0.74	
学習	2.57	0.76	2.73	0.73	2.37*
先生への不満	2.03	0.92	2.15	0.94	
部活	2.11	0.92	2.37	0.93	3.01**
健康	2.52	0.88	2.52	0.92	

(*: $p<.05$、**: $p<.01$)

(イ) 学年差

中学生の悩みにおける学年差を検討するため,分散分析を行った。その結果,「心理」($F(2,467)=11.93, p<.01$),「学習」($F(2,467)=23.21, p<.01$),「先生への不満」($F(2,467)=37.51, p<.01$),「部活」($F(2,467)=31.44, p<.01$),「健康」($F(2,467)=3.79, p<.05$) で有意差が認められた (表 3)。

多重比較の結果,「心理」,「学習」,「先生への不満」,「部活」の 4 領域それぞれで,1%水準で有意に,1 年生よりも,2 年生および 3 年生の得点が高かった。また,「健康」においては,5%水準で有意に,1 年生よりも 3 年生の得点が高かった。どの領域においても,2 年生と 3 年生での得点に差は見られなかった。

また,尺度全体における学年差を検討するため分散分析をした結果,有意差が認められた($F(2,467)=33.26, p<.01$)。多重比較を見ると,1%水準で有意に,1 年生よりも,2 年生および 3 年生の得点が高かった。ここでも 2 年生と 3 年生での得点に差は見られなかった。

表 3　中学生の悩み経験の学年差

N=470

			M	*SD*	*F*値	多重比較
全体	①	1年生	2.10	0.53	33.26	①<<②
	②	2年生	2.42	0.62		①<<③
	③	3年生	2.60	0.55		
心理	①	1年生	2.04	0.69	11.93	①<<②
	②	2年生	2.33	0.76		①<<③
	③	3年生	2.46	0.72		
学習	①	1年生	2.40	0.73	23.21	①<<②
	②	2年生	2.80	0.74		①<<③
	③	3年生	2.98	0.70		
先生への不満	①	1年生	1.71	0.78	37.51	①<<②
	②	2年生	2.36	0.93		①<<③
	③	3年生	2.50	0.89		
部活	①	1年生	1.89	0.79	31.44	①<<②
	②	2年生	2.58	0.93		①<<③
	③	3年生	2.36	0.99		
健康	①	1年生	2.41	0.90	3.79	①<③
	②	2年生	2.60	0.91		
	③	3年生	2.71	0.86		

(<: p<.05、<<: p<.01)

3) SC への被援助志向性

(ア) 悩み経験による被援助志向性

SC に対する被援助志向性を,記述統計により検討した (表 4)。なお,点数が高いほど,SC への被援助志向性が高いことを示す (平均値=3.00)。その結果,悩み経験尺度全体における SC への被援助志向性は,1.99 であった。下位尺度ごとに見ると,SC への被援助志向性は,「学習」領域で最も高く,「健康」領域において最も低かった。

表 4　SC に対する被援助志向性

N=470

	M	*SD*
全体	1.99	1.12
心理	1.99	1.15
学習	2.07	1.27
先生への不満	1.99	1.22
部活	2.02	1.25
健康	1.87	1.15

(イ) 悩み経験による SC への被援助志向性の差

悩み経験の下位尺度ごとに,下位尺度得点を求めた。それぞれの下位尺度得点の上位 25%内を高群,下位 25%内を低群とした。これら高低群と,SC への被援助志向性の得点との関係を t 検定によ

り検討した（表 5）。

その結果,「心理」領域の悩み経験の高群は,「心理」領域（$t(251)=4.98, p<.01$）,「学習」領域（$t(251)=3.85, p<.01$）,「先生への不満」領域（$t(251)=3.80, p<.01$）,「部活」領域（$t(251)=4.54, p<.01$）,「健康」領域（$t(251)=4.35, p<.01$）の全てにおいて,1%水準で有意に,低群よりも SC への被援助志向性得点が高かった。また,「学習」領域の悩み経験の高群も同じく,「心理」領域（$t(246)=3.41, p<.01$）,「学習」領域（$t(246)=4.40, p<.01$）,「先生への不満」領域（$t(246)=3.05, p<.01$）,「部活」領域（$t(246)=3.72, p<.01$）,「健康」領域（$t(246)=3.17, p<.01$）の全てにおいて,1%水準で有意に,低群よりも SC への被援助志向性得点が高かった。さらに,「部活」領域の悩み経験の高群は,「部活」領域のみにおいて,1%水準で有意に,低群よりも SC への被援助志向性得点が高かった（$t(300)=2.74, p<.01$）。

なお,「先生への不満」領域および「健康」領域での悩み経験の高低群においては,どの悩みの領域に関しても,SC への被援助志向性に有意な差は認められなかった。

表 5　悩み経験領域による SC への被援助志向性の関係　　*N*=470

				SCへの被援助志向性									
				心理		学習		先生への不満		部活動		健康	
			N	*M*	*SD*	*M*	*SD*	*M*	*SD*	*M*	*SD*	*M*	*SD*
悩みの経験領域	Ⅰ 心理	低群	122	1.60	0.98	1.75	1.19	1.69	1.14	1.67	1.10	1.50	0.94
		高群	131	2.31	1.25	2.38	1.40	2.28	1.31	2.39	1.41	2.11	1.25
		*t*値		4.98**		3.85**		3.80**		4.54**		4.58**	
	Ⅱ 学習	低群	129	1.70	1.01	1.67	1.03	1.73	1.11	1.69	1.06	1.63	1.04
		高群	119	2.19	1.25	2.36	1.43	2.19	1.27	2.28	1.40	2.10	1.30
		*t*値		3.41**		4.40**		3.05**		3.72**		3.17*	
	Ⅲ 先生への不満	低群	122	1.91	1.14	1.99	1.29	1.85	1.20	1.94	1.24	1.79	1.09
		高群	121	2.05	1.20	2.09	1.29	2.14	1.35	2.11	1.37	1.82	1.11
		*t*値		0.92		0.60		1.78		1.03		0.23	
	Ⅳ 部活動	低群	162	1.86	1.09	1.97	1.29	1.84	1.19	1.82	1.16	1.79	1.18
		高群	140	2.06	1.19	2.18	1.28	2.05	1.21	2.22	1.36	1.88	1.14
		*t*値		1.53		1.37		1.47		2.74**		0.66	
	Ⅴ 健康	低群	177	1.95	1.16	2.02	1.26	1.97	1.22	1.96	1.21	1.79	1.13
		高群	198	1.95	1.13	2.04	1.28	1.91	1.16	1.95	1.24	1.95	1.21
		*t*値		0.03		0.16		0.51		0.11		1.28	

*：$p<.05$、**：$p<.01$

4.　考察

1)　中学生の悩み経験尺度

本研究では,因子分析の結果,「心理」,「学習」,「先生への不満」,「部活」,「健康」の 5 つの因子が抽出された。これは,山口ら（2004）が,「心理・社会」,「学習」,「進路」,「心身・健康」

の4因子を抽出した結果とは若干異なるものであった。けれども,「心理」,「先生への不満」,「部活」が「心理・社会」,「学習」が「学習」,「健康」が「心身・健康」に対応すると考えられ,若干の違いはあるものの,ほぼ支持する結果となった。特に,山口ら（2004）の研究における「進路」領域が,本研究では「心理」領域に統合され,「心理・社会」領域が,本研究では「心理」,「先生への不満」,「部活」の 3 領域に分割されたことは興味深い。この結果は,現代の中学生の学校生活においては,先生との関係および部活での悩みが大きなトピックスであることを示唆している。

しかし,第Ⅲ因子以降の項目数が 2 項目ずつと少なく,第五因子の信頼性がやや低めであった。今後,検討が必要である。

2) 男女差および学年差について

男女差においては,尺度全体および「学習」領域,「部活」領域において,女子の方が悩み経験の得点が高いことが明らかになった。すなわち,「学習」領域および「部活」領域に関して,男子よりも女子の悩み経験が多いことを意味している。これは,女子が男子に比べて,成績で親の期待に応えようとする気持ちが強いことが影響していると推察される。

また,学年差については,すべての因子において有意差が確認され,1年生よりも2年生あるいは3年生の得点が高かった。つまり,すべての悩みの領域で,1 年生よりも,2・3 年生の方が悩み経験が多いということになる。中学校では,学年が上がるにつれ,責任ある立場にさらされたり,学業成績や進路選択が現実的な問題として明らかになったりする。そのため,1 年生の時期が最も悩み経験が少ないと考えられる。

永井・新井（2009）は,「心理・社会的問題についての悩み経験」と「学習・進路的問題についての悩み経験」において,男子よりも女子の方が有意に悩み経験の得点が高く,1 年生よりも 3 年生で得点が高いことを明らかにしている。本研究では,心理領域での男女差は確認されなかったが,その他は概ね共通した結果であったと言える。こうした男女差や学年差は援助ニーズの高さを示唆していると考えられ,女子,あるいは 2 年生,3 年生に対して,より手厚い心理教育的援助サービスを行う必要があると思われる。

3) 悩み経験の領域と SC への被援助志向性

本研究において,SC に対する被援助志向性の得点は,「学習」領域で最も高い値であり,「健康」領域で最も低い値であった。すなわち,中学生は,学習に関する悩みがあるときに,SC に援助を希求していると言える。学習に関する知見は教師の方が豊富であるが,教育現場において教師は生徒を評価する存在である。そのため,受容的かつ保護的な存在としての SC に相談したいと考えると推測される。一方,「健康」領域での被援助志向性が低いことは,健康に関する悩みはやはり養護教諭に相談するからであろう。

なお,SC に対する被援助志向性の平均得点は全体で 1.99,最も高い「学習」領域に関しても 2.07 であり,やや低い得点となった。これは,中学生が,SC に援助を求めることがまだまだ少ないことを示唆している。平田・渡邊（2007）は,生徒は相談相手としての SC を教師に近いイメージとして

捉えていたり,相談事が教師や保護者に伝わることを懸念していたり,SC の専門性や守秘義務をあまり理解していなかったりすると報告した。本研究における SC への被援助志向性の低さも,このようなことが影響していると考えられる。これは,山口ら（2004）を支持する結果でもあり,SC 派遣後 17 年が経過した現在でも,有効に活用されていない現状であることを示していると考えられる。しかし,山口ら（2004）の研究に比べて,SC への被援助志向性はより高まっている。今後のより一層の活用が期待される。

4） 悩み経験の多さと SC への被援助志向性の関係

悩み経験と SC への被援助志向性との関係を検討するために,悩み経験各領域ごとに t 検定を実施した。その結果,「心理」領域あるいは「学習」領域の悩み経験が多い生徒は,経験の少ない生徒よりも SC への被援助志向性が高かった。この結果からは,「心理」領域・「学習」領域での悩み経験の多い生徒ほど,どの領域の悩みに対しても SC の援助を希求していると言える。山口ら（2004）の研究では,悩み高群の方が低群よりも役割的ヘルパーあるいはボランティア的ヘルパーに対する被援助志向性が,悩み高群において高かったことを明らかにしている。悩み経験が多い生徒は,周囲のヘルパーに援助を求める傾向が高く,それは SC に対しても同様の傾向を持っていることが予想された。

また,部活の悩み経験が多い子どもたちは,悩み経験の少ない子どもたちよりも,部活の悩みにおいてのみ SC への被援助志向性が高かった。部活における悩み経験の多い生徒は,他の悩みの領域では適応している、あるいは養護教諭、教師、保護者、友人などに援助を求めていることが要因として推測される。

【引用・参考文献】

平田乃美・渡邊亮子 (2007). 学校臨床心理学の実践に対する子どもの理解と学級環境の評価―スクールカウンセラー・相談員を複数配置した公立中学校の事例研究― 白鷗大学教育学部論文集 I

石隈利紀 (1999). 学校心理学―教師・スクールカウンセラー・保護者のチームによる心理教育的援助サービス― 誠信書房

水野治久・石隈利紀 (1999). 被援助志向性, 被援助行動に関する研究の動向 教育心理学研究, **47**, 530-539.

文部科学省 (2011) 平成 22 年度「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」について 文部科学省初等中等教育局児童生徒課
(http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/23/08/__icsFiles/afieldfile/2011/08/04/1309304_01.pdf)

永井智・新井邦二郎 (2009) 中学生における友人に対する援助要請の統計的特徴―相談行動,悩み経験,利益・コストにおける基礎的データの検討― 発達臨床心理学研究 **20**, 11-20.

山口豊一・水野治久・石隈利紀 (2004) 中学生の悩み経験・深刻度と被援助志向性の関連―学校心理学の視点を生かした実践のために― カウンセリング研究 **37** No.3, 43-51.